

大阪教区 2012年度典礼研修会

10月28日(日) サクラファミリア
フランコ・ソットコルノラ神父(ザベリオ会)

第二ヴァチカン公会議開幕50周年

真命山・諸宗教対話・靈性交流センター

『典礼憲章』とミサの前半である「ことばの典礼」

(熊本県玉名郡和水町)

日本カトリック典礼委員

ミサ聖祭を構成している二つの部分、すなわち、言葉の典礼と聖体の典礼は
相互に固く結ばれて 一つの礼拝行為を成している (典礼憲章 56)

1 聖書による神学上の基礎

- 1) 『言は神であった・・・言は肉となった』(ヨハネによる福音1:1、14)
- 2) 過越祭のハガダ・(ハレル)・ベラカ
- 3) 契約の書と締結(出エジプト記24)



2 司牧による指針

神のことばの朗読とその説明(『ローマ・ミサ典礼書の総則暫定版』29)

聖書が教会で朗読されるときには、神ご自身がその民に語られ、キリストは、ご自身のことばのうちに現存して福音を告げられる。

したがって、神のことばの朗読は典礼のもっとも重要な要素であり、一同は尊敬をもってこれを聞かなければならない。聖書朗読による神のことばは、すべての時代のすべての人に向けられ、すべての人が理解できるものであるとしても、生き生きとした展開、すなわち、典礼行為の一部である説教によって、いっそう十全な理解とその効果は増大するものである。

※同書の55-71、また『朗読聖書の緒言』11-57も参照のこと(55は別紙に)

※ベネディクト16世使徒的勸告『Verbum Domini』57-60,64-70も参照

- 1) ことばの典礼の基本的構成
- 2) 朗読聖書(福音朗読書)(『朗読聖書の緒言35-37』→別紙)
- 3) 朗読者の奉仕(『朗読聖書の緒言55』→別紙)
- 4) ことばの告知
- 5) 朗読台
- 6) 神のことばの荘厳な告知(『ローマ・ミサ典礼書の総則暫定版175・212』)
- 7) ホミリア(説教)(『Verbum Domini』59・60)



3 結びの注意

- 1) 外面的参加(paticipatio externa)と内面的参加(paticipatio interna)
- 2) 礼拝としてのことばの典礼
- 3) ことばの典礼とその実施

32 神のことばを告げ知らせる場所



教会堂の中には、的確に配置され、固定された、ふさわしい高さを持つ高められた場所を設ける。それは神のことばの尊厳にふさわしいものであり、同時に、ミサには神のことばの食卓とキリストのからだの食卓が用意されていることを信者にはっきりと意識させるようなものでなければならない。また、ことばの典礼の間、信者がよく聞き取ることができ、注意を払えるような場が必要である。それゆえ、それぞれの教会堂の構造を考えて、朗読台と祭壇との的確な組み合わせを工夫する。

33 この朗読台は、その構造を考慮して適宜、永続的に、または少なくとも盛儀の日などに一時的に、控え目な装飾を施すとよい。朗読台は、神のことばが奉仕者をとおして告げ知らされる場であるから、朗読台の使用は本来、朗読、答唱詩編および復活賛歌に限られる。ただし説教と信者の祈りは、ことばの典礼全体と深いつながりがあるので朗読台で行うことができる。その他の者、たとえば解説者、歌唱者、歌の指揮者などは朗読台に立たない方がよい。

34 朗読台は、種々の祭儀に役立つよう、ときには幾人かの奉仕者がそこに立つこともあるから、幅の広いものにする。さらに、朗読者が朗読台で読むために、十分な照明を配慮する。また、信者が容易に聞き取ることができるよう、必要に応じて現代の拡声装置を用いることができる。

35 祭儀において神のことばを告げ知らせるために用いる朗読聖書

神のことばの朗読に用いる本は、奉仕者、動作、場所、その他のことがらと相まって、自らの民に語りかける神の現存を聴衆に思い起こさせるものである。それゆえ、典礼行為において天上のものとしるしとも象徴ともなる朗読聖書は、真に品位のある、立派な、美しいものであるように配慮する。

36 福音の告知は、つねにことばの典礼そのものの頂点であるから、その朗読書も東西両典礼の伝統の中で、いつも他の朗読書との間に区別がつけられるようになった。朗読福音書は、細心の注意を払って製本され、装飾が施され、他の朗読書よりも丁重に取り扱われてきた、したがって、現代においても、司教座聖堂や少なくとも人々のよく集まる大きな小教区や教会堂においては、朗読福音書は美しく装丁され、他の朗読書と区別することが大いに勧められる。この本は、助祭叙階式の中で助祭に授与され、また司教叙階式において被選司教の頭上に置かれ、開いたまま支えられる。

37 祭儀で用いられる朗読聖書は、神のことばの尊厳ゆえに、司牧的な他の補助資料、たとえば朗読の準備や個人的な黙想のために作られた信者用の印刷物などで代用することがあってはならない。

55 信者が神のことばの朗読を聞いて、聖書の快い生き生きとした感銘を受けるよう、この役務を果たす朗読者は、たとえ選任を受けた者でなくても、真にふさわしいものであり、よく準備のできた者でなければならない。この準備は、まず第一に霊的なものでなければならないが、技術的と呼ばれる準備も必要である。

霊的な準備は少なくとも、聖書と典礼に関する養成を前提とする。

聖書に関する養成は、朗読者が朗読箇所を本来の文脈において把握すること、および啓示の訪れの中心を信仰の光において理解することができるようになることを目指さなければならない。

典礼に関する養成は、ことばの典礼の意味と構造、およびことばの典礼と感謝の典礼の根拠を知る能力を朗読者に与えるものでなければならない。

技術的な準備は、朗読者が肉声または最近の拡声装置の助けを借りて、会衆の前で読む力を日増しに身につけるものでなければならない。」

『ローマ・ミサ典礼書の総則暫定版』より

175 (助祭は) アレルヤ唱あるいは他の歌が歌われているときに香が用いられる場合、司祭が香を入れるのを助ける。それから司祭の前で深く頭を下げて祝福を願い、小声で「祝福をお願いします」と言う。司祭は祝福をして、「主の福音にふさわしく・・・」を唱え、助祭は自分に十字架のしるしをして「アーメン」と答える。それから祭壇に礼をして、祭壇に置かれている朗読聖書を取り、これを少し高く掲げ、香がたかれている香炉を持つ香炉係と火をともしたろうそくを持つ奉仕者を先に立てて朗読台へ行く。そこで手を合わせ「主はみなさんとともに」と言って会衆にあいさつし、次いで「〇〇による福音」と言い、親指で福音書にしるしをし、次に自分の額、口、胸にしるしをし、福音書に献香して、福音を告げ知らせる。終わると「キリストに賛美」と告げ、一同は「キリストに賛美」と答える。続いて、接吻をもって福音書に表敬して「神のことばによって・・・」と沈黙のうちに祈り、司祭のところへ戻る。

助祭が司教を手伝うとき、接吻を受けるべき福音書を司教のもとに運ぶか、あるいは助祭自らが福音書に接吻し、「主の福音によって・・・」と沈黙のうちに唱える。いっそう荘厳な祭儀では、状況に応じて、司教は朗読福音書によって会衆に祝福を与える。

それから、助祭は祭器卓あるいはふさわしい適切な場所に朗読聖書を運ぶことができる。

212 (共同司式司祭は) ことばの典礼の間、自分の席にいて司式司祭と同様に着席したり、起立したりする。アレルヤ唱が始まると、沈黙のうちに香を入れ、福音を告げる助祭を祝福する司教を除いて、一同は起立する。司祭が司式する共同司式では、助祭が不在の場合に福音を告げる共同司式司祭は、主式司祭に祝福を願わず、祝福も受けない。

